

はじめに はにわとは？

現在、日本で一番古い博物館は東京国立博物館です。

1872年（明治5年）に東京・湯島聖堂大成殿で開催された博覧会から、東京国立博物館の歴史は始まりました。2022年には創立150周年を迎え、特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」（2022年10月18日～12月18日）では、同館が当時所蔵していた国宝89件すべてを含む名品が展示され、数多くの来館者でにぎわいました。

そして、本書が刊行される2024年には特別展「はにわ」（2024年10月16日～12月8日）が開催されます。同館所蔵の「挂甲の武人」が、埴輪として初めて国宝に指定されてから50周年を記念した特別展であり、いまだかつてないスケールで催される埴輪展です。九州国立博物館にも巡回し、テレビや新聞など各種メディア注目の特別展でもあり、昨今の埴輪の人気を象徴するかのようです。

その特別展「はにわ」の担当者のうち、河野正訓と山本亮が本書を執筆しました。ふだんは東京国立博物館の研究員として、埴輪など考古遺物（作品）のお世話をするのが仕事です。展示案を考えて遺物の展示作業をしたり、講演会やギャラリートークをしたり、遺物の修理に立ち会ったり、他館で開催される特別展に遺物を貸出しするための手続きや、外部研究者が当館所蔵品を調査するためのセッティングをするなど、ほかにもさまざまな業務があります。もちろん自分自身の研究を進めることも仕事のうちです。

東京国立博物館は質量ともに日本屈指の埴輪のコレクションを誇ります。そのため、お世話をしている考古遺物のなかでも、とりわけ埴輪とは日常的に接しています。その東京国立博物館での経験を中心に、本書を執筆しました。

わたしたち二人は、ともに京都大学で考古学を学び、さまざまな経歴を経て、現在、東京国立博物館で働いています。そのため、本書では、わたしたちが身近に接してきた関西と関東の埴輪を中心に取りあげ、さらに全国各地の埴輪もできるだけ紹介するようにしました。また、もともとは古墳時代の鉄器や土器を専門に研究していた二人なので、根っからの埴輪の研究者というわけではありません。そのような立場だからこそ、より客観的に現在の埴輪研究を俯瞰できるのではないかと感じています。

じつは埴輪の研究をみると、研究者の立場によって埴輪にさまざまな解釈が与えられているのです。そのため、研究者が自説をもとに本を執筆した場合、ほかの研究者とまったくちがうことが書かれている、ということが多々あるのです。そういう意味では、さまざまな研究者の説を複合的に紹介している点も、本書の特徴といえます。

ところで、そもそも埴輪とはなんでしょう？

埴輪とは、円筒状やなにか——道具や人物など——をかたどった、粘土のやきものです。いまから約1400～1800年前、3世紀後半～6世紀にかけて、「王」など権力者のために、前方後円墳に代表される古墳という墓をつくった時代があり

ました。古墳時代です。日本列島の東北地方南部から九州地方にかけて古墳は存在しますが、その一部の古墳の上や周囲に、埴輪は立てられました。

まだこの時代に「日本」という国はありません。「倭」というクニがあったと認識されていますが、この倭を「ヤマト」とよぶか「ワ」とよぶかは、研究者によって分かれています。この倭を統治していたのは畿内地域（現在の大阪府・奈良県を中心とする地域）にいた大王です。大王と各地の王とはゆるやかながら連合し、5世紀後半以降に大王による中央集権化が段階的に進んでいくのが、古墳時代であると考えられます。

ここでは「王」といいましたが、これも研究者によっては「首長」や「豪族」というよび方をしています。けっして王だけが古墳に埋葬されたわけではなく、埴輪を立てたわけでもないのですが、本書では便宜上、権力者のことを「王」とよぶこととします。

古今東西、埴輪は話題にあがっていますが、本書はその埴輪についての入門書です。その内容は、さまざまな研究者の地道でかつ膨大な調査研究の成果をもとに、著者二人で再構成したものです。ただし、専門書とは一線を画しているため、引用や参考にした文献の提示は最低限に留めています。ご理解ください。

本書には埴輪にまつわる25のヒミツが詰まっています。冒頭から順に読んで、気になるヒミツから読んでかまいません。魅力あふれる埴輪の世界をお楽しみください。

I

はにわ

の

種類

うがた 鶺鴒形埴輪

首には鈴がついているため、人に飼われていたことがわかります
群馬県高崎市 保渡田(ほどた)八幡塚古墳出土/5世紀後半/高崎市教育委員会蔵
写真提供:かみつけの里博物館



みずどりがた 水鳥形埴輪

白鳥のようにするためか、白い土でつくられています
大阪府羽曳野(はびきの)市 誉田御廟山(こんだごびょうやま)古墳(応神天皇陵古墳)出土/5世紀前半
東京国立博物館蔵



重要文化財 翼を広げた鳥形埴輪

両翼を広げて滑空する姿を表現した珍しい埴輪です
和歌山県和歌山市 大日山35号墳出土/6世紀前半
和歌山県教育委員会蔵
写真提供:和歌山県立紀伊風土記の丘



重要文化財 水鳥形埴輪

一つの古墳からたくさんの水鳥形埴輪が出土した例もあります
兵庫県朝来(あさご)市 池田古墳出土
5世紀前半/兵庫県立考古博物館蔵
写真提供:兵庫県立考古博物館



ヒナ

コケッココー
赤くぬられたトサカ



にわとりがた 鶺鴒形埴輪

栃木県真岡市
鶺鴒塚古墳出土
古墳時代・6世紀後半
東京国立博物館蔵



山口県防府市の玉祖(たまのおや)神社の黒柏鶏(くろかしわけい)は日本古来のニワトリで、鳴き声が7~8秒、長いものでは10秒にもなります
撮影:河野正訓

埴輪になった鳥もいます。すべての鳥がモデルになったわけではなく、ニワトリや水鳥、ウ(鶉)やタカなどに限定され、それぞれ性格が異なります。

とりわけ数が多いのがニワトリです。鶉形埴輪は、鳥の埴輪のなかでもっとも早く、4世紀半ば頃にはつくられはじめられています。そして、6世紀まで継続して長くつくりつけられました。それゆえに、日本列島の鳥形埴輪のなかでも鶉形埴輪は、およそ300例と最も出土量が多いのです。

ニワトリは、いまでは卵や肉など食用としておなじみですが、古墳時代の人びとにとっては、食べるためではなく、神聖な鳥でした。そのなごりで、現代でも一部の神社では神聖な鳥として、ニワトリを放し飼いにしています。

では、どうしてニワトリは神聖視されたのでしょうか。それは、ニワトリが朝にコケッコと鳴くことに関係があります。古墳時代は現代とちがい、街灯のない時代です。夜は暗闇となり、邪悪なものが暗躍しているかのように感じられたことでしょう。そのため、日の太陽がとて大切だったのです。コケッコと鳴いて朝を告げるニワトリは、当時の人びとにとって、太陽を導き邪悪なものを退けてくれる魔除けの鳥だったのです。

似たようなとして、日本神話の天の岩戸(いわと)伝説があります。アマテラスオオミカミが天の岩戸に隠れた際に、世の中が真っ暗闇になりました。ずっと夜のままになってしまったため、困ったほかの神々が、なんとか天の岩戸から出てきてもらおうと、試行錯誤を重ねます。そのひとつが、ニワトリを鳴かせるというものでし

た。最後にはめでたく岩戸が開いてアマテラスオオミカミが姿を現します。そうすると世の中が明るくなり、みんながよろこんだ、という伝説です。

一方で、ニワトリが埴輪になることに別の理由を考える研究者もいます。オスとメスのニワトリがセツトになることもあることから、「つがいになって「命(卵)を産む」という行為を象徴している」という説です。この場合、古墳に埋葬された人のよみがえりを願ったのでしよう。

鶉形埴輪からやや遅れて、4世紀後半に水鳥形埴輪(みずどりがた)がつくられるようになります。

ハクチョウに代表される水鳥については、『日本書紀』に興味深い記述があります。戦いの帰り道、ヤマトケルが現在の三重県の地で亡くなり、白鳥に姿を変えてヤマト(現在の奈良県)の方へ飛びたった、というものです。この伝説から、水鳥形埴輪には被葬者の魂を運ぶ役割があった、と考える研究者もいます。

しかし、近年、水鳥の役割の見直しを迫るような事例が見つかりました。それは、一つの古墳のために複数の水鳥形埴輪をつくったもので、そのなかの1体は背中にヒナをのせています(↓41ページ)。魂を運ぶのであれば1体でよいはずで、水鳥がヒナをのせているのも魂を運ぶ情景としては不自然です。むしろ、水鳥の群れの様子を表現しているかのようです。この事例をどう考えるのか、今後の研究に期待がつのります。人物埴輪が登場する5世紀には、人との関わりの中でウヤタカの埴輪が少数ながら現れます。ウは鶉飼(うは鶉飼)い、タカは鷹狩りというように、いずれも王が愛好した催しごとを表現しているという見解があります。なお、鶉飼いは現在ののようなやり方ではなく、ウを放って魚が溜まったら呼び戻して魚を吐き出させる「放ち鶉飼い」でした。

奈良時代の文献である『日本書紀』には約30種、『万葉集』では約40種の鳥に関する記述があります。ほかの鳥も古墳時代にはいたのでしょうが、埴輪のモチーフとしては採用されませんでした。逆にいうと、果たすべき役割を期待して特定の鳥を選び、埴輪としてつくったのだと考えられます。